高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経の漢字声調について

――保延本法華経単字との比較――

榎木久薫

一　はじめに

「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経」は、鎌倉初期に高山寺の明恵を中心とした華厳教学集団において、呉音字音直読された文献である。稿者は先に、高山寺において本文献の調査を行ない、基礎的な整理の報告[1]、加点字の分韻表の形での報告[2]、及び漢音系字音の混入についての考察[3]を行なった。本稿はこれらの報告に続いて、「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経」の漢字音を、日本漢字音の歴史的変化の中に位置付ける作業の一つとして、差声された声点を整理することによって声調の実態を明らかにしようとするものである。

本攷では、実際の経典読誦の際の声調と、単字の声調のずれという観点から考察を行なった。個々の漢字の単字呉音声調が、平・上・去・入のいずれであったかは絶対的なものではないが、ここでは一つの比較の対象として「保延本法華経単字」（以下「法華経単字」と略称する）の反切によって把握される声調を用いることとする。

なお、本資料の加点字には若干の漢音読字が含まれている。「法華経単字」との比較に際しては、これらの漢音読字は除いた。「法華経単字」に見られる呉音声調が本文献にもそのまま伝承されていれば、〈表1〉上「法華経単字」と本文献とで対応する声調の箇所にのみ用例が出現するはずである。しかし実際には、対応のずれた箇所にも用例が出現する。本攷は、このような用例を分析することによって、本文献の漢字声調の姿を明らかにしようとするものである。

二　去声字の上声化

平安末期～鎌倉初・中期に於る、漢字声調の日本語アクセントへの同化現象として、去声字の上声化現象が指摘されている[4]。この現象は、次の二つの現象に分けられる。一つは、単字としての一音節去声字の上声化である。これは、曲調アクセント（一音節の中でのアクセント変化）を避けるためとされる。もう一つは、上声字・去声字の後の二音節去声字の上声化である。これは、中低型アクセント（一語の中でアクセントが一度下がって再度上がること）を避けるためとされる。まず、本文献においてこの二つの現象がどのように現れるかについて見る。

「法華経単字」去声字で本文献に差声例のある字について、音節数によって区別すると〈表2〉のようになる（平声点が差声された例については後に考察を加える）。

一音節字

一音節字についてみると、去声点が差声されているのは、一例のみである（「法華経単字」非掲出字を含めて）。

〈表1〉

法華経単字＼本文献	平	去	入
平	212 422	32 50	1 1
上	37 56	129 252	4 4
去	19 27	93 147	
入	1 1	2 2	105 200
平軽	4 4		
入軽		1 1	12 12

（表中の数値は、上段が異なり字数・下段が延べ字数）

〈表2〉

法華経単字＼本文献	去	
	1音節	2音節
平	8 11	24 39
上	94 211	35 41
去	1 1	93 146

耶　未(墨上)マ耶*(墨去)ヤ（「邪」ヲ見消チ訂正）45・27

（以下の用例表示において末尾の数字は、巻次・行数である。また、＊を附したものは参考例である）

漢字に対する見消チ訂正が、漢字にまで及ばなかったものと考えられる。

二音節字

二音節字の多くは、去声が差声されている。上声が差声されている例の多くは、前接字が上声か去声である。前接字が上声か去声であって、二音節字に去声点が差声されている例は、次の一例である。

哉　偉(上)キ哉(去濁)サイ　16・173

ちなみに、「法華経単字」非掲出字で、前接字が上声か去声であって二音節字に去声点が差声されているのは次の諸例である。

＊「法華経単字」非掲出字

奔　死(平)シ屍(上)シ奔(去)ホン逐(入)チク癲(平)テン癇(去)ケン　76・431

矯　虚(上)コ矯(去)ケウ　58・169

暎　鑒(薄墨朱上濁)カム暎(薄墨朱去)エイ徹(薄墨朱入)テツ　33・39

麗　精(去)シャウ麗(去)レイ　25・50

肝　腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ　27・265

腎　腸(去)チャウ腎(去)シン肝(去)カン肺(平)ハイ　27・265

「虚矯」「精麗」が語として認識されていなかったのか否かは不明である。「死屍奔逐癲癇」は「死屍」「奔逐」で語のまとまりと考えられる。「鑒暎徹」は「暎徹」に対して加点した例が他に二例ある。「腸腎肝肺」は一字ごとに一語と認識されていたのであろう。このように、これらの用例の多くは、当該字の前に語の切れ目があるものと考えられる。

「法華経単字」去声二音節字に対する本文献の去声点・上声点差声例の分布を見ると、本文献の加点者は、殆どの場合、加点された漢字を何文字かのまとまりで（場合によっては一字で）、日本語としての語と捉えていたものと考えられる。これは、本文献の字音直読が、中国語を指向したものではなく、日本語の範囲内での営為であったことを意味するものであろう。

但しここで言う語の、日本語としての定着度には幅があったものと考えられる。恐らく、多くの語は臨時一語的なものだったであろう。臨時一語的なものであっても、一語として認識することの出来ない中低型のアクセントが避けられたということである。

ただ、少数ながら、語頭（一字のみの加点を含む）および平声・入声字に下接する二音節字に上声点が差声された例がある。

海　海(上)カイ蚌*(平)ハウ(擦消ノ上)　10・291
珍　珍(墨上)チン那ナ　45・379
萌　萌(墨上)マウ　28・C145
　＊群(去濁)クン萌(上)マウ　24・273
瘡　瘡(墨朱上)サウ疱(墨朱平)ハウ　78・409
　＊癰(去)ヰヨウ瘡(上)△サウ　12・186
洹　洹(墨上)ヲン　58・230
剛　剛(上濁)カウ齋(平)サイ　1・70
莖　莖(墨上濁)*キヤウ(単点欠)　39・54
　＊隱(平)ヲン莖(去)キヤウ　59・276
　＊枝(墨朱上)シ莖(墨朱上)キヤウ　6・154
痟　痟(墨上)セウ　36・B169
爪　爪(上)サウ甲(入)カフ　27・368
謬　謬(墨上)メウ　59・402
　＊錯△(入)シヤク謬△(去)メウ△　34・72
　＊錯(入)シヤク謬(去)メウ　36・B174
　＊錯(入)シヤク謬(去)メウ　18・242
　＊錯(入)シヤク謬(去)メウ　44・25
　＊舛(平)セン謬△(去)メウ　18・166
牀　牀(上)シヤウ蓐(入)ニク　28・C154
　＊「法華経単字」非掲出字
竿　竿(墨上)カン　66・154
　＊爲△(上)ヰ竿(上)カン　22・84

沼　沼(墨上)セウ　64・200
畔　畔(墨上)ハン多(墨上)タ　45・70
漂　漂(上)ヘウ淪(平)リン　3・61
　漂(上)ヘウ溺(入)ニヤク　13・232
　漂(上)ヘウ　3・106
　漂(上)ヘウ汨(入)コツ　78・62
殞　殞(上)ヰン滅(入)メツ　75・226
漿　漿(墨上)シヤウ　59・475
牆　牆(墨上)シヤウ　66・187
　垣(平)クワン牆(上)シヤウ　64・80
　牆(上)△シヤウ△　59・299
　垣△(平)□□牆(上)シヤウ　60・106
　牆(墨上濁)シヤウ壁(墨入)ヒヤク　62・401
痊　痊(上)セン瘉*(平)ユ(「愈」ヲ見消チ訂正)　76・432
瞿　瞿△(上)ロク曇(上濁)トム　12・82
罔　罔(去)マウ　3・177
輞　昧(平)輞(去)マウ　59・289
　＊輪(去)リン輞*(上)マウ(偏ヘ擦消ノ上)　10・289
胝　胝(墨上)テイ　45・10
　涯(上濁)カイ　3・330
　＊涯(去濁)カイ際(平)サイ　11・158
瞬　瞬(上濁)シユン　22・162
　瞬(墨上濁)シユン　68・11
　瞬(墨平濁)シユン　68・59
　＊不(上)フ瞬(上)シユン　76・282
裳　裳(墨上濁)シヤウ　33・278
　＊衣(上)ヰ裳(上濁)シヤウ若(入)ニヤク敢(去濁)タム　24・204
仗　仗(上濁)チヤウ　3・110
壤　壤(上濁)シヤウ　76・402

鑒　鑒(薄墨朱上濁)カム映(薄墨朱去)エイ徹(薄墨朱入)テツ　33・39
＊鑒(墨去濁)カム徹テツ　27・44
盛　盛(墨上濁)△シャウ伽(墨上)キャ　45・22

去声点差声例か、上声・去声字に下接する上声点差声例のある字で、語頭（一字のみの加点を含む）および平声・入声字に下接する二音節字に上声点の差声された用例が見られるものは、何等かの日本語としてのアクセント変化の反映である可能性が考えられる。これ以外の、上声点差声例しか見られない字が、単字で二音節上声字と認識されていたのか否かを確定することは出来ない。

日本漢字音における呉音の声調体系は平・去・入の三声体系であったと考えられている。[5] 単字で二音節上声字が認められていたとすれば、平・去・入という三声体系から平・上・去・入の四声体系に、呉音の声調体系自体が変化したということになる。その理由は、別途考えなければならない。

ただ、単字の声調として二音節上声字を認めない時期の漢語アクセントからの変化として見れば、次のようなことが言える。漢語の基本形と考えられる二字漢語において、それまで存在しなかった、語頭あるいは低音節の後に高音節が二音節連続するアクセント型が出現したということである。

なお、ここで取り上げた用例には、墨声点差声字が多く見られる。先に明らかにしたように、本文献の加点字の内、朱声点差声字のほとんどは高山寺所蔵の「新訳華厳経音義」を直接に参照しつつ加点したものと考えられる。これに対して、墨声点差声字のほとんどは「新訳華厳経音義」に現れず、また奥書などの徴証より寛元（一二四三～一二四七）から正安（一二九九～一三〇二）に高山寺において加点されたものと推定される。墨声点差声字が別の音義を参照しつつ加点されたものである可能性を否定することは出来ないが、おそらくは「新訳華厳経音義」のような音義に依らない漢字の声調認識が現れたものと見てよいであろう。

三　去声字の平声点差声

〈表1・2〉に見られるように、「法華経単字」去声字で本文献で平声点が差声された用例が存在する。

「法華経単字」と本文献とで個々の漢字の声調認識に異なりがあった可能性は否定できない。「延・叢・連・泉・打・當・竄・踐・雉」の諸字は、本文献で複数の用例があり、いずれも平声点が差声されているものである。

しかし少数ながら、本文献において平声以外の声点が差声された用例も見られる字がある。

一音節字

蒲　紺(去)コム蒲*(平)（某字二重書）　48・176
＊蒲(墨上)ホ　45・33
＊訶カ理リ蒲(墨上)ホ　45・33
又　樓(上)ル博(入軽濁)ハク又(平)シャ　3・84
樓(上)ル博(入軽濁)ハク又(平)シャ　3・71
又(平)シャ迦(上)カ　3・77
＊又△(上)シャ　楚我ノ反　76・399
波　波(平)ハ濤(平)タウ　13・333
＊烏(墨上)ウ波(墨上)ハ跋(墨入濁)ハツ多(墨上)タ　45・68
流　迅(平)シン流(平)ル　1・163
＊駛(上)シ流(上)ル　12・352
＊湍(去)タン流(上)ル競(平)キャウ奔(去)ホン　13・284

二音節字

練　該(去濁)カイ練(平)レン　76・438
＊練(去)レン　34・374
難　艱(去)カン難(平)ナン不(上)フ憚(平)タン　66・75
＊難(去)測(入)シキ　3・139

＊難(去)測(入)シキ 3・166
宴　宴(平)エム黙(入)ホク 59・358
＊宴(去)エン△寝(平)シム 16・313
狼　焦(去)セウ然(上)ネン烏(上)ウ鷲(平濁)シュ犲(平)サイ狼(平)ラウ 60・378
＊狐(上)コ狼(上)ラウ 27・270
玩　珍(去)チン玩(平濁)クワン 34・344
＊玩*(去濁)クワン味(平)ミ（「玩」ヲ見消チ訂正）48・143

「叉」の用例中、反切注記のある用例の反切下字「我」は、「法華経単字」では平声である。しかし、本文献で反切注記があり、反切下字が「我」である漢字に差声された声点は、すべて上声点である。なお、「宴」の用例「宴黙」の「黙」字の字音仮名表記（漢音形はボク）から、この語は漢音読漢語であった可能性がある。

ここに取り上げた「叉」を含め一音節字に上声点が差声されている諸字は、一音節去声字が曲調アクセントを避けるために上声化し、それが更に平声化する場合があったことを示すものであろう。二音節字についても、中低型アクセントを避けるための上声化以外に平声化する場合があったものと考えられる。

四　平声字の上声点・去声点差声

「法華経単字」で平声字であり、本文献で上声・去声点の差声されている字を音節数によって分けると〈表3〉のようになる。

上声点差声例

一音節字

上声点差声例の多くが、一音節字である。「法華経単字」と本文献とで個々の漢字の声調認識に異なりがあった可能性は否定できない。「滋・鳩・摩・懼・趺・歩」の諸字は、本文献で複数の用例があり、いずれも上声点が差声されているものである。しかし、上声点以外に平声点差声例の見られる字が二字ある。

〈表3〉

法華経単字＼本文献	平 1音節	平 2音節
上	32 48	5 8
去		19 27

阿　阿(上)ア掲(入)カツ 13・351
＊阿△(平)ア蘭△(去)ラン若△(平)ニャ 1・18
膚　皮(平)ヒ膚(上)フ 75・205
潤(墨平)ニン澤(墨入濁)ダク皮(墨平)ヒ膚(墨上)フ細(墨入)＊ナン＊英(墨平)ナン(擦消欠) 25・297
連(平)レン膚(上)フ 25・234
＊連(平)レン膚(平)フ 27・8

先に見た一音節去声字の平声化例と合せて考えると、曲調アクセントを避けるために上声化した一音節字と平声の一音節字とが、それぞれ平声化・上声化することがあったものと考えられる。

また、「連膚」に平声点が差声された例と上声点が差声された例とが見られることから、この現象にゆれのあったことが指摘できる。「皮膚」が二例とも上声点の差声であること（なぜ上声なのかという問題があるが）を踏まえると次のようなことが推測される。臨時一語的な漢語としては「連膚」のアクセントは○○○であるが、熟合度の高い「皮膚」との類推から、一語意識を持つと、アクセントも「皮膚」のアクセント○●の影響を受けて○○

●に変化するという可能性である。

先に見た去声一音節字の平声点差声と、平声一音節字の上声点差声とを比べると、次のようなことが言える。「法華経単字」去声一音節字は、実際の読誦では、上声の調値で現れる。そのような字が平声化するのは、「法華経単字」平声一音節字が上声化するのと裏腹の関係である。しかし、実際の用例数には大きな偏りがある。これは、本文献の加点者の声調認識において、この二つの現象が次のように区別して捉えられていたことによるものと考えられる。

去声一音節字が実際の読誦において上声化することが、まず声調変化として認識される。それが更に平声化することは、単字声調から見れば、二段階目の声調変化である。これに対して、平声一音節字が上声化するのは、声調変化としては一段階目の声調変化である。このような、単字声調からの声調変化としての隔たりの差が用例数の多寡に現れているものと考えられる。

二音節字

二音節字は次の例がすべてである。

闡　闡(墨上)揚(墨上)ヤウ 33・245
　＊闡(墨去)セン 4・31
　＊闡(去)セン 3・164
　＊闡(墨朱去)セン明(墨朱上)ミヤウ 6・439
　＊闡(墨去)セム 62・304
　＊闡(平)セン 3・241
　＊弘(上濁)ク闡(平)セン 3・273
　＊闡(平)セン 3・34
　＊闡(平)セン 18・329
　＊開(去)カイ闡(平)セン 57・326
草　編(去)ヘン草(上)サウ 64・202
　芒(去)マウ草(上)サウ 13・368
兩　兩(墨上)＊リヤウ膝(墨入)シツ(声点欠) 39・68
嫌　譏(上)キ嫌(上濁)ケム 58・260
　＊嫌ム(去)ケム怪＊(平)クヱ(擦消ノ上) 77・114
　＊嫌(去)ケム恨(上)ロン 57・37
髄　骨(入)コツ髄(上濁)スイ 55・17
　髄(上濁)スイ 34・344
　骨(入)コツ髄(上濁)スイ 25・235

「闡」には、平声・上声・去声点差声例がすべて見られる。この内、去声点・上声点差声例の多くが墨点である。このことから、この字の単字の声調は加点者の認識において平声であったものと考えられる。この字に上声の差声が現れるのは、去声化を経由してのことと考えられる。

「草」の二例は、上接字去声である。単字で平声であったものが、去声化することによって漢語として中低型アクセントとなり、更に上声化した可能性は高くないであろう。「嫌」についても同様のことが言える。この二字は加点者にとっては単字で去声として認識されていた可能性があろう。「兩」は語頭字であるが、墨声点であるので加点の質に問題がある。「髄」は上接字入声が二例、一字の差声が一例である。この漢字は広韻で上声であり、「髄」あるいは「骨髄」が漢音読語と意識されていた可能性も考えられる。あるいは、この語は日常漢語として一語意識を強く持たれていた語として、そのアクセント型が現れたことも考えられる。

これらのことと、用例が少ないことと合せて考えると、次のようなことが指摘できる。平声二音節字が上声化するためには、去声化の過程を経る必要がある。声調変化としては二段階を経ることになり、実際にそのような変化の結果上声化することは少なかったものと考えられる。

去声点差声例

すべて二音節字である。「法華経単字」と本文献とで個々の漢字の声調認識に異なりがあった可能性は否定できない。「聰・陛・纏」の諸字は、本文献で複数の用例があり、いずれも去声点が差声されているものである。ただ、去声以外の声点の差声の見られるものとして、前で取り上げた上声点差声例の見られる「闡」「嫌」と、次の「昧」の例がある。

昧　蒙(墨平)モウ昧(墨去)マイ 27・70

昧　昧(平)輞(去)マウ 59・289

「昧」の平声点差声例は墨点である。

前で見た上声点差声例に比べて用例数が多いのは、声調変化として一段階目の変化だからであろう。

五　入声に関わる差声

入声字に入声以外の声点が差声された例、および「法華経単字」において入声以外の声調の漢字に入声点が差声された例について見る。

「法華経単字」入声

「法華経単字」で入声字で本文献で入声点以外の声点が差声されているのは次の諸例である。

平声点差声例

或　或(平)穀(入)コク 59・289

「或」はなぜ平声点が差声されているのか、理由が定かでない。用例はこの一例のみである。字音の仮名加点がないことから、声点として差声されたものでない可能性もあるであろう。

上声点差声例

鉢　鉢(墨上)ハ攤(墨上)ラ麼(墨上)マ陀(墨上濁)タ 45・66

藉　藉(上)シャ此(平)△シ 28・C165

末　苫(平)セム末(上)マ羅(上)ラ 3・267

薄　薄(墨上濁)ハ底(墨去)テイ 45・24

いずれも、梵語音訳語の例であって、韻尾が表記されていない。このことによって、入声点が避けられたものと考えられる。

「法華経単字」平声

「法華経単字」で平声字で本文献で入声点が差声されているものは次の一例である。

細　潤(墨平)ニン澤(墨入濁)タク皮(墨平)ヒ膚(墨上)フ細(墨入)＊ナン＊耎(墨平)ナン(擦消欠) 25・297

＊細(平)サイ滑(入)クワツ 48・177

＊細(墨去)セイ 45・51

「細」は墨点であり、字音の加点自体にも疑問がある。

「法華経単字」去声

「法華経単字」で去声字で本文献で入声が差声さているのは次の二例である。

門　門(墨入)蔽(墨平)ヘイ 4・178

＊門(平)モン闥(入濁)タツ 22・40

＊門(薄墨朱平)闥(薄墨朱入)タツ 33・18

＊門(平)闊(去)コン 68・69

陵　遣＊(平)タイ相(平)サウ陵(入)リョウ奪(入濁)タツ姦(去)カン淫(上)イム＊(擦消ノ上・「ム」ハ「ン」ニ重書) 21・65

「門」は墨点である。入声点の差声された理由は不明である。

「陵」は唇内入声と誤解しての差声であろう。ちなみに、本文献で「法華経単字」非掲出字を含めて唇内入声字で韻尾表記が「〜ウ」で入声点が差声されているのは次の諸例である。

滌　滌△(入)テウ 76・73

葉　爲(墨上)＊葉(墨入)ヱウ(声点欠) 39・56

法　樂(平濁)ケウ法(入)ホウ樂(平濁)ケウ義(平濁)キ 58・174

洽　盈(去)ヤウ洽(入濁)カウ 59・291

また、本文献で「法華経単字」非掲出字を含めて唇内入声字で韻尾表記が「～ウ」で入声以外の声点が差声された例は見られない。

六　軽声点差声例について

本文献には、仮名音形から呉音読（明らかに漢音と認定できないものを含む）と考えられる字に軽声点の差声された例が見られる。この内、平声軽声点差声例は四例のみである。

平声軽点差声例

暢　暢(墨平軽)チャウ克(入)コク緒(去)カイ　22・126
吒　尼(上)ニ吒(平軽)タ　22・183
仰　渇△(入)カツ仰△(平軽)カウ　34・93
貝　珂(上)カ貝*(平軽濁)ハイ*壁(入)ヒヤク(擦消ノ上)　34・341

平声軽点差声字は、すべて「法華経単字」掲出字である。平声軽点差声字については、用例も僅かであって論ずることは難しい。

入声軽点差声例

一方、入声軽声点の差声された例は、「法華経単字」非掲出字を含めて次の諸例である。

暢　暢(墨平軽)チャウ克(入)コク緒(去)カイ　22・126
吒　尼(上)ニ吒(平軽)タ　22・183
仰　渇△(入)カツ仰△(平軽)カウ　34・93
貝　珂(上)カ貝*(平軽濁)ハイ*壁(入)ヒヤク(擦消ノ上)　34・341
瑟　瑟(入軽)シュツ吒(平)タ　76・387
育　育(入軽)イク　3・323
澤　澤(入軽)タク　41・142
天　天(入軽)*(声点欠)　62・350
玉　螺(上)ラ貝*(平濁)*ハイ*壁*(入軽濁)*ヒヤク*玉(入軽濁)クキヨク(擦消ノ上)　36・B172
撃　扣(薄墨朱平)コウ撃(薄墨朱入軽)キヤク　33・28
蹙　頻(平)ヒン蹙△*(入軽)ロ(「蹙」ヲ見消チ訂正)　58・339
勒　轡(平)ヒ勒(入軽)ロク　62・80
谷　巖(平濁)カム谷*(入軽)コク(某字ニ重書)　66・220
乏　匱(墨朱平)クキヲ乏(墨朱入軽濁)ホク　78・180
納　喉(平)コウ吻(平)フン吐(上)ト納(入軽)ナフ抑(入)ヨク縱(去濁)シュウ高(去)カウ低(平)テイ　17・13
飾　校(墨去)ケウ飾(墨入軽濁)シキ　6・148
濁　層(去濁)ソウ級(入軽)キフ　17・9
奪　暎(去)エイ奪(入軽濁)タツ　11・65
閣　挾(入)ケフ閣(入軽)カク　64・31
＊「法華経単字」非掲出字
壁　螺(上)ラ貝*(平濁)*ハイ*壁*(入軽濁)*ヒヤク*玉(入軽濁)クキヨク(擦消ノ上)　36・B172
粒　粒(墨入軽)リフ　24・217
作　傭△(平)ヨウ作(入軽)サク　77・172
戮　被(平)ヒ戮(入軽)ロク　25・233
弩　上(平濁)弩(入軽)カク　48・148
博　樓(上)ル博(入軽濁)ハク叉(平)シヤ　3・71
博　樓(上)ル博(入軽濁)ハク叉(平)シヤ　3・84
級　層(去濁)ソウ級(入軽)キフ　16・9
粒　完(去濁)クワン粒(入軽)リフ　27・111
戟　孤(上)コ矢(上)シ劔(去)ケン戟(入軽濁)キヤク　59・88

沼本氏は、呉音入声軽の出現する条件として、入声字（入声重）が上声字または去声字に下接する場合、もしくは、上声字に上接する場合に出現するとされ、一種の和語アクセント化と考えておられる。[7]

入声軽点差声字は、「法華経単字」非掲出字を含めて、沼本氏が挙げられた条件に合致する用例より、合致しない用例の方が多

い。声点差声字全体から見れば、平声・入声の軽声点差声例はごく僅かであり、重の声点の差声位置がずれた可能性もあるであろう。ただ、軽声の調値として見ても、日本語のアクセント型として不自然な型は見られない。沼本氏の挙げられた条件以外のアクセント変化の反映の可能性も考えられる。

七　まとめ

「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経」の声点差声字を「保延本法華経単字」の声調と比較した結果、一音節去声字の上声化（曲調アクセントを避ける）および上声字・去声字に下接する二音節去声字の上声化（中低型アクセントを避ける）以外、本文献の呉音声調は、呉音単字の声調と概ね一致することが明らかになった。これは、本文献の加点が寛喜（鎌倉初期）の時期であることから見て、自然な姿である。ただ、本文献を経典の呉音字音直読文献としてみるならば、一音節去声字の上声化および上声字・去声字の後の二音節去声字の上声化が見られることから次のようなことが指摘できる。本文献の加点者は、殆どの場合、加点された漢字を何文字かのまとまりで（場合によっては一字で）、日本語としての語と捉えていたものと考えられる。

但し、先にも述べたように、ここで言う語の、日本語としての定着度には幅があったものと考えられる。恐らく、多くの語は臨時一語的なものだったであろう。臨時一語としての単字声調の連続が、日本語アクセントと齟齬を来さない限り、そのままの形で受け入れるのが基本であったと考えられる。しかし、一音節去声字の上声化および上声字・去声字に下接する二音節去声字の上声化以外にも声調変化の現象が見られる。このような変化の内には、次のような場合も含まれるであろう。

臨時一語の、日本語アクセントとして不自然でない単字声調の連続も、語として熟合度が高まると更にアクセント変化を起こす。[3] このような現象は、和語にはしばしば認められることである。本文献の加点者が加点された漢字のまとまりを語と認識したとすれば、和語に生ずる現象が漢語においても生ずることは自然なことであろう。

注

（1）拙稿「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経をめぐって」（鎌倉時代語研究　第十九輯　平成八年八月）

（2）拙稿「高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経加点字翻刻並びに分韻表」（鎌倉時代語研究　第二十一輯　平成十　年五月）

（3）拙稿「字音直読資料としての高山寺蔵寛喜元年識語本新訳華厳経―漢音系字音の混入について―」（鎌倉時代語研究　第二十三輯　平成十二年十月）

（4）沼本克明『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就ての研究』第一部第四章　呉音に於ける和化現象の検討　第一部第五章　呉音の声調体系に就て（昭和五十七年三月　武蔵野書院）

（5）注（4）論文

（6）注（3）論文

（7）注（4）論文

（8）例えば、星（ホシ）○●＋空（ソラ）●○は、星空（ホシゾラ）○●●○のアクセント型と○●●●のアクセント型とがある。○●●●のアクセント型の方が熟合度の高いアクセント型と考えられる。

［付記］本稿を成すに当たり、文献の閲覧・調査に関して、高山寺小川千恵御住職を初めとする高山寺御当局の方々の御高配を賜った。また、築島裕先生・小林芳規先生を初めとする高山寺典籍

文書綜合調査団の方々には、様々のお導きを頂いた。記して深謝申し上げる次第である。